AACK 京都大学学士山岳会 No.75

# Newsletter

December 2015

http://www.aack.or.jp

目　次

マサ・コン峰 30 周年と現役部員によるブータントレッキングの合同報告会 .....1

京都大学山岳部マサ・コン登頂 30 周年を記念して「マサコン・チョモラリトレッキング」報告
2015 年京都大学山岳部ブータントレッキング隊 .....4

マサ・コン峰初登頂へのみちのり .....10

第 34 回雲南懇話会（2015 年 10 月 3 日開催）講演概要
山岸久雄、安仁屋政武.....11

AACK 関東会・笹ヶ峰会　新年会のご案内 .....13

AACK ニュース .....13

会員動向 .....13

編集後記 .....14

## マサ・コン峰 30 周年と現役部員による ブータントレッキングの合同報告会

今年は京都大学ブータンヒマラヤ学術登山隊がブータンの未踏峰マサ・コン（7200 m）の登頂に成功して 30 周年の節目に当たる。その記念すべき年に京都大学山岳部の現役部員を中心とした 10 人が、マサ・コン隊の BC までのトレッキングルートを踏破した。1985 年のマサ・コン隊を振り返り、現役部員のトレッキング報告を聞く会が 10 月 10 日、京都大学稲盛財団記念館で開かれ、新旧の隊員がブータンと京都大の「過去・現在・未来」を語り合った。

（記録・榊原雅晴）

◇

報告会では今年 86 歳になるマサ・コン隊の堀了平隊長がお元気な姿を見せた。堀隊長は「マサ・コンの頂上にブータン国旗と KUAC の旗が翻ったときは本当にうれしかった。私は帰国後、2 カ月半の空白を埋めるべく研究に全力を挙げたが、そのときの励ましになったのは登攀隊員の頑張りだった。マサ・コンの成功は多くの人びとの協力があったから。深く感謝している」とあいさつした。

堀了平隊長

### ■京大とブータンの歴史

続いて副隊長だった栗田靖之さんが「京大とブータンの歴史」について話し、現役部員にも分かるように「57 年の歴史を 10 分間で」解説

してみせた。

両者の交流の歴史は1957年11月に、当時のケサン・ウォンチュク王妃がおしのびで京都を訪れたことにさかのぼる。王妃の来日を本多勝一さん（探検部）が聞きつけ、桑原武夫・京都大人文科学研究所教授、芦田譲治・理学部教授らがおもてなしした。その機会に中尾佐助・大阪府立大助教授が「ブータンに行きたい」と王妃にお願いし、翌年6カ月にわたってブータンを訪れることができた。中尾さんの報告「秘境ブータン」は日本エッセイスト賞に輝いた。

その後も1968年に小野寺幸之進・農学部教授がブータンを訪問。69年には桑原教授を総隊長とし、松尾稔・工学部助教授を隊長とする「京大ブータン学術調査隊」がタシガンまで21日かけ、ブータン東部の横断に成功した。この隊はブータン入国に大変苦労したのだが、偶然にもケサン王妃が直前に再来日され、「私の客人として招待する」と言っていただいた。

「ブータンの人たちは、日本に来て世話になると、必ず招き返すというのが大原則」というのが栗田さんの経験則だ。

こうした交流を踏まえ1981年に桑原さんを初代会長として「日本ブータン友好協会」が設立された。桑原さん、西堀栄三郎さん、中尾さんらAACKの長老グループが親善訪問に訪れた際、ドチュラ峠から見えたのがマサ・コン峰だった。

西堀さんが「栗田、あの山は処女峰か？」と尋ねるので、「処女峰です」と答えると、「鼻の高いべっぴんさんや。あの山を登れ！」と指示されたという。

ちょうどそのころ山岳部の若手が、登山対象となる山をブータンで探しており、ガンカープンスムが対象となっていた。だがそれを偵察したところ、「とても京大の手に負える山ではない」となり、マサ・コンに転進することになったのだ。

残念ながらマサ・コン遠征後、京大とブータンとはしばらく疎遠な時期が続いた。だが2012年から、松沢哲郎・現AACK会長、松林公蔵・前AACK会長らの尽力で京都大学ブータン友好プログラムが始まり、その延長で現役部員によるブータントレッキングが実現した。

栗田さんは「長年ブータンに注目してきた人間として、本当にうれしい」と締めくくった。

**■マサ・コンの登攀報告**

先発隊員としてマサ・コンのルート工作に当たった月原敏博さんは「マサ・コン峰の登攀」について、当時の写真を見せながら報告した。

ブータン登山への準備は81、82年ごろから始まっていた。83年にルナナまでトレッキングに入れたが、モンスーンがきつく山は見えなかった。翌年にガンカープンスムの登山許可が得られ偵察に向かったが、「これは登れない」と分かり、急遽転進となった。ある意味で無謀、綱渡り的なやり方だった。

そのマサ・コンも、ガンサーの写真はあったものの、下部の状況が分からず、必ずしも登れるという確証はなかった。先発隊で偵察に走り回った結果、下部ルートが確認できたのは本隊がBCに到着する直前だった。下の難所、上の難所をうまく突破できたのが幸運だった。

マサ･コンは13, 14, 15日と3日続けてアタックをかけたが、その後、サイクロンがやって来た。ぎりぎりのアタックだった。

ブータン計画を振り返り月原さんは「僕たちの回生でブータンに一番熱心だったのが、富永浩三君だった。われわれの回生は剱岳・赤谷尾根の遭難直後に入部したが、上級生がしょぼんとしているときに、右も左も分からない1回生が『とにかくブータンに行く』と言い出した。1回生恐るべしと思うと同時に、何をお願いしても快く引き受けてくださった先輩方のありがたさを感じた」と話した。

**■現役のトレッキング報告**

トレッキングパーティーのリーダーを務め、4日前に帰国したばかりの六車光貴さん（工学部2回生）が最後にトレッキング概要を説明した。

本当は昨年9月にネパールトレッキングを計画していたが、薬師岳・岩井谷の遭難で2人が亡くなった。2人は特にトレッキングを楽しみにしていたので、何とか僕たちでグレートヒマラヤを見たいと思っていたが、ネパールで大地震があった。その後、いろいろと話があったが、京大ブータン友好プログラムの支援によって今回のトレッキングが実現した。

グレートヒマラヤを見て個々人の見聞を広げ、今後の山岳部活動のモチベーションを上げる。先輩たちの遠征の一部を追体験し、遠征の

現役による報告

いろはを学ぶことを目的とした。

トレッキングの前半は雨にたたられたが、ある朝急に晴れ、朝焼けのチョモラリ（7315 m）が見えた。グレートヒマラヤの神々しい姿を見ることができ感動した。切り立った山容のJichu Drake（6850 m）には登高欲をかきたてられた。

計画は6月に決まり、3、4カ月しか準備期間がなく、大変だった。スキルだけでなく、渉外の大切さも実感し、よい経験になった。ブータンを訪れ、自然の豊かさに影響を受けた。生活に仏教が密接に関わっており、自然に対する考えが全く違うことに衝撃を受けた。

またリーダーを務め高所における判断や、大人数パーティーの運用の難しさを感じた。コミュニケーション能力の必要性も感じさせられた。

◇

報告終了後、あいさつに立った幸島司郎・山岳部長は「昨年の岩井谷遭難の後、反省を重ねながら少しずつ活動を再開してきた。今年になり、やはり海外、ヒマラヤに行きたいという気持ちが高まり、ブータンという話になった。京大とブータンの、50年を超す歴史を踏まえ、松沢・AACK会長、松林・前AACK会長らの尽力で実現した。現役にとってもここまで早く事態が進展するとは思ってなかったので、準備が大変だった。だがそれぞれに得るところがあった」と総括。そして「山を見る、人に会う、自然を見るということは大切なこと。いい経験をさせてもらった」と、長年にわたるOBの活動や協力に感謝した。

参加者全員による記念撮影（竹田晋也さん撮影）

# 京都大学山岳部マサ・コン登頂30周年を記念して「マサコン・チョモラリトレッキング」報告

2015年京都大学山岳部ブータントレッキング隊

## 1. 本トレッキングの経緯

本トレッキングを実行するに至った経緯と、それに深く関係する1985年の京都大学ブータンヒマラヤ学術登山隊（マサ・コン峰遠征隊）の簡単な紹介を以下に記述する。このトレッキング計画は、今年度5月に開かれた京都大学学士山岳会総会にて現役山岳部員が幸島司郎部長にブータンの山を登りたい旨を伝え、そこで幸島部長からの賛同を受けることができたことから始まった。その背景には、昨年度のネパール遠征が事故により頓挫してしまったことによる挫折、そして現役部員達の強いヒマラヤに対する憧れがあった。残念なことにネパールにて大地震*1が発生し、再度ネパール遠征を立て直すのは難しくなったこと、また今年がマサ・コン峰遠征隊の登頂からちょうど30年であったことを良い機会とし、ブータンを目指すこととなった。

ここで30年前のマサ・コン峰登頂の記録を簡単ではあるが紹介したいと思う。はじめにこの登頂計画は1983年の踏査隊、1984年の偵察隊の成果の基に成り立ったことを述べておきたい。詳述はしないが、ここには計画段階で登攀対象を変更しなければならないほどの困難が待ち受けており、3年間の綿密な準備のおかげでそれを克服し、その結果マサ・コン峰登頂を成し遂げることができたことも述べておこう。（報告書*2を参照）話を85年のマサ・コン遠征隊にもどそう。この登山隊は先発隊と本隊に別れ、先発隊はベースキャンプ（BC）の確定、更に登路の確認と偵察を目的として本隊よりも2週間ほど早く入国し、行動していた。本隊の入国は8月25日、登攀開始が9月15日、登頂成功が10月13日である。この長い月日に見られるようにこの遠征は、標高7000 mでの高度の影響、そして難しいルートの開拓を克服した上での栄光であった。月原元隊員は、登攀における難所を運良く突破できたこと、サイクロンの直前に登頂を完遂することができたことなどの幸運が重なってこの遠征は成功を収めたのだと語っていた。　（文責：秋本克規）

*1 2015年4月25日発生の地震Mw7.8（アメリカ地質調査所）

*2 京都大学山岳部報告第17号1983～85年ブータン・ヒマラヤ登山特集

## 2. 2015年京都大学ブータントレッキング隊隊員

隊長　六車光貴　19歳
　京都大学工学部2回生
副隊長　原　宏輔　30歳
　京都大学理学研究科博士課程
記録　酒井英人　20歳
　京都大学文学部2回生
医療　山下　耕　21歳
　京都大学総合人間学部3回生
装備　外園喜大　23歳
　京都大学理学部6回生
隊員　川口康平　20歳
　京都大学工学部1回生
隊員　青木俊輔　18歳
　京都大学理学部1回生
隊員　秋本克規　19歳
　京都大学経済学部1回生
サポート隊員　荻原宏章　30歳
　京都大学文学研究科修士課程
サポート隊員　河合清定　25歳
　京都大学農学研究科修士課程
※サポート隊はラヤまでのトレッキングを同行。

（以上10名）

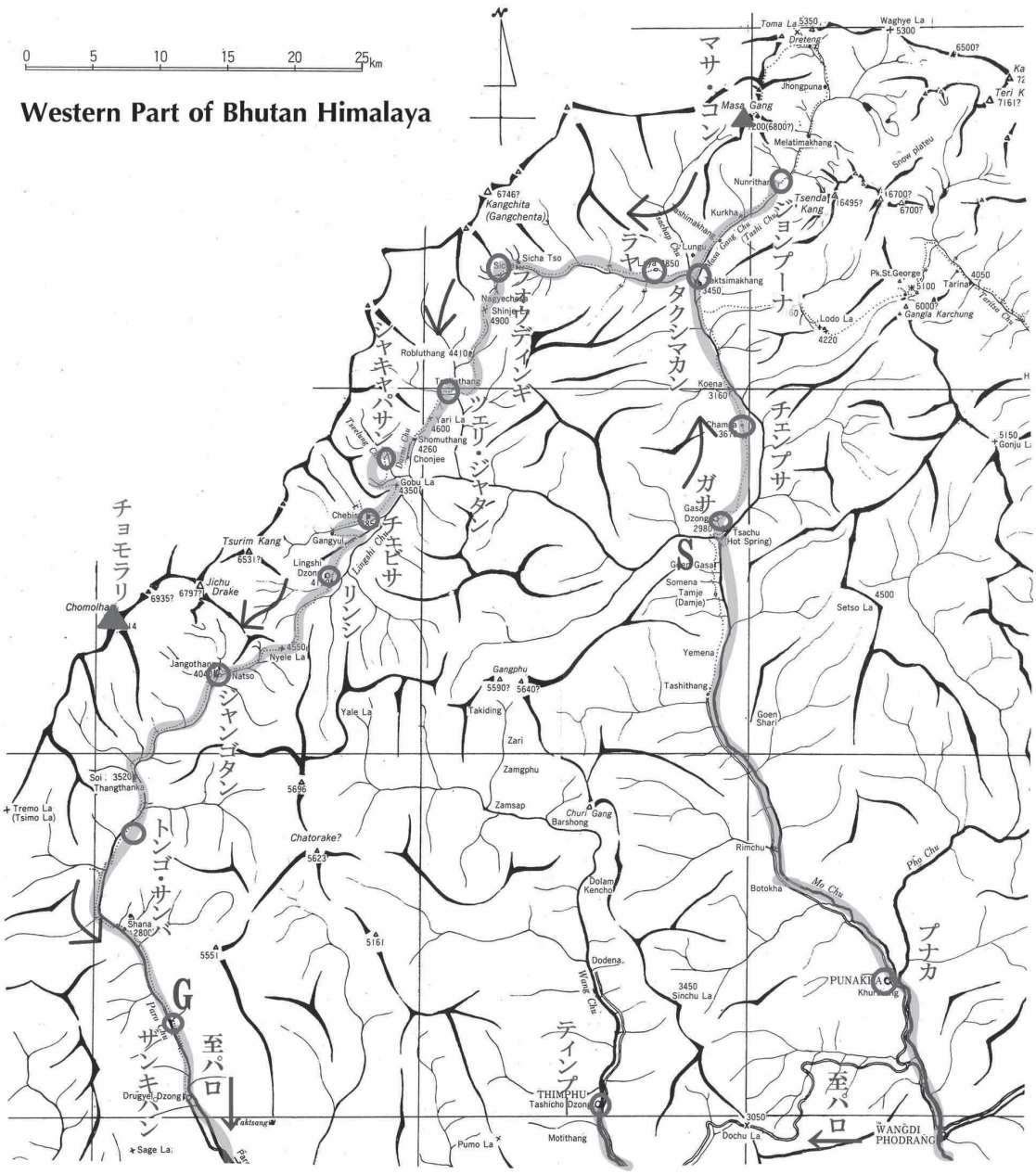
## 3. 行動記録

◎9月10日　京都→関空

部室で最後の確認を終え、みなで大衆中華料理屋へ。慣れ親しんだこの味は当分の間お預けであるに違いない。20時15分京都駅より関空行きの特急に乗る。

◎9月11日　関空→パロ（2400 m）晴れ午後より曇り時々雨

0時30分発のバンコク行飛行機に搭乗。現




トレッキング概念図

地時間3時40分バンコク着。

バンコクで乗り継ぎ待ちをして、6時50分バンコク発の便にて現地時間11時にブータンの玄関であるパロ国際空港着。旅行会社のバスでホテルまで移動。このホテル「オラタン」は第4代ブータン国王の戴冠式の際、国外来賓の宿泊施設として建てられたものが始まりである。チェックインを済ませ、現地携帯電話のSIMなど必要品を買いだすほか、観光をしてブータン最初の日を終える。

◎9月12日　パロ→プナカ（1391 m）曇り、にわか雨

7時朝食、8時出発。街ではこの行動パターンがお決まりとなる。バスにてプナカまで。インド軍の協力によって作られたという舗装道路は立派なものである。

写真１　マサ・コンの氷河

◎９月13日　プナカ→ガサ（2820 m）晴れのち曇り、にわか雨

この日はトレッキング開始地点のガサまで移動。未舗装の林道に入る。途中ちょっとした小川を突っ切る場面もあった。

今トレッキングのファーストキャンプであるガサは、林道わきの湿った草地で、すでにポーターと馬、そして我々のテントが待っていた。12時20分到着。時間があるので有名な温泉に行く。ネパール系労働者やラマ僧など、近辺の人間が汗を流しに来ていた。トレッキング開始に向けて英気を養う。

◎９月14日　ガサ→チェンプサ（3750 m）晴れのち雨

この日より予定17日間の歩行が始まる。各テントにサーヴされた紅茶にて朝を迎えた私たちは、トレッキング「客」としての扱いを実感した。生活は快適極まりないものになろう。

8時出発。ガサからの道は、はじめツヅラ折りの林道で、そのままよく踏まれた細い山道にはいる。バリ・ラ（約3900 m）という峠を越えると下りはじめ、14時50分チェンプサ着。尾根上の小広場であるが、ひどいぬかるみ且つ展望はない。何よりもヒルが目立つ。このテント地でサンダルを履くのは愚行である。当初ここではなくさらに下った川沿いにあるコイナに宿泊予定であったが、ガイドの勧めにより変更となった。

◎9月15日　チェンプサ→タクシマカン(3413 m)曇り時々晴れ、夜半雨

7時50分発。コイナまではひどい泥の道を行く。昨日今日と道は泥っぽく、ごみも目立つ。10時30分コイナ着。コイナの様子は、それまでガイドから聞いていた話と違い、宿泊小屋の混雑もなく、下地のぬかるみはチェンプサ以下のものだった。ガイドとのコミュニケーションはこれからの課題である。

以降は比較的整った川沿いの道を行くが、ところどころモンスーンの長雨のためか崩落しており、安定した歩行が必要とされた。16時25分タクシマカン着。広い草地にヤクがぽつぽついる。晴れれば気持ちの良いキャンプ地であろう。そばには軍の駐屯地があり、むやみに近づくと犬に襲われることもあるそうだ。

◎９月16日　タクシマカン→ジョンプーナ（4185 m）晴れのち雨

8時発。谷沿いの道を行く。左に見える山群がマサ・コン、右に見えるのがツェンダ・カンのものである。古いアーミーキャンプ跡を11時頃に過ぎ、1時間150 mアップのペースでキャンプ地の手前まで行くが、氷河から流れ出る小川に阻まれる。ガイドは橋が見つけられない様子だ。仕方がないので、適地を探して裸足渡渉をする。深いところで膝程度だが、なにぶん刺すように冷たい。何事もなく済んだものの、準備段階でこの渡渉は想定していなかった。渡り終えると、今日のキャンプ地ジョンプーナ(4185 m)であった。巨大なボルダーが2つ、我々を迎えてくれた。夜間は高度を稼いだこともあり結構冷える。

◎９月17日　遠足（4400 m）曇り時々晴れ、夜半雨

8時20分発。今日は85年京大マサ・コン隊のベースキャンプまでなるべく近づこうと遠足である。気持ちの良い谷底の草原を行く。途中、昔チベット軍に備えて構築したという塹壕が残っていた。ただし天気は本調子でなく、最終到達地点までに、マサ・コンはその肩と、氷河の末端を見せるにとどまった（写真1）。記念撮影（4440 m地点）をして、引き返す。帰途で放牧民のテントにお邪魔し、接待を受ける。ヤクの毛で編まれた黒い外張りが特徴的な彼らの家は、意外にもメンバー10人全員が入れる広さで、中心に据えられた炉を囲む形となった。その火で暖められたバター茶と大量のヤクチーズを振舞われ、大満足であった。明日は来た道を引き返し、ラヤ方面へ。トレッキングも中盤戦だ。

◎９月18日　ジョンプーナ→ラヤ（3900 m）

晴れ、にわか雨

7時30分発。おととい渡渉に苦労したことを踏まえ、ルートファインディング。首尾良くガイドが橋を見つけ、簡単に対岸に移ることができた。13時40分タクシマカンの分岐点にて六車隊長が［WE ARE ALL FINE.］と日本にメッセージを送る。

分岐からラヤ方面へ森の中の急登を行き、視界が開けてくると、谷間に張り付くように営まれたラヤの村が望める。ちょうど麦の刈り入れが終わったところで、枯れ草色の棚畑には馬が放してあった。宿泊地に15時40分着。そこはラヤ村の東はずれにある丘陵の斜面で、旅行会社のオフィスや、役所の入った建物そばの整備された場所である。この日の夜は10人そろって最後のミーティングだ。明日はサポートパーティの2人が、ガサ方面に下りてしまう。今後の注意点を確認しあい、託される形で最後のミーティングを終えた。

◎9月19日　ラヤでレスト　晴れ、夕方から曇り

朝8時、パーティが分隊。サポートパーティの2人を見送り、トレッキング開始以来の好天のなかレストを迎える。各々が自由時間を村の散策などで楽しんだ後、みなで学校にお邪魔する。生徒、ガイド、ポーターらを交えたスポーツ交流がはじまる。サッカーでは日本対ブータンの争いとなり、見事4-4の引き分けに収めた。夜は村人たちとともにダンスに興じる者もいた。

◎9月20日　ラヤ→フォウディンギ（4430 m）曇り時々雨

昨日の分隊で、馬が減ったため荷を運べないことが朝になって発覚する。ガイドたちは現地調達で対処、と深刻には構えていない。馬が集まったのは9時20分で出発が遅れる。

ここからもイレギュラーであった。今年6月に起こった氷河湖決壊洪水の影響で旧来の道が破壊されたため、ほぼ平坦なはずのリミタン（4160 m）までの道が、登ったり下ったりの迂回路になっていた。加えて、宿泊を予定していたリミタンに、チベットへ向かう馬飼いたちという先客があり、一つ奥のキャンプ地に行かざるを得なくなった。

そのため予定外の長時間行動となり、キャンプ地フォウディンギ（4430 m）に到着したのは17時05分となってしまった。この日は頭痛、食欲不振といった高山病の症状を訴えるものが何人か出た。

写真2　本トレッキングの最高到達点シンチェ・ラ峠5000 m

◎9月21日　フォウディンギにて高所順応　曇り時々雨

標高5000 mのシンチェ・ラという峠を明日万全に越えるため、この日は高所順応を図る。ゆっくりと高度を上げ、一定時間滞在する。

峠までの道を4800 m地点まで上がり、1時間ビバーク。その後キャンプ地まで戻る。ビバーク地点にはセイタカダイオウの群生が見られた。12時40分キャンプサイト着。

◎9月22日　フォウディンギ→ツェリ・ジャタン（3976 m）曇り時々雨

8時出発。昨日の順応の成果もあり、シンチェ・ラを特に問題なく越える（写真2）。数人が軽い頭痛を訴えた程度。ブータンの峠にはどこもタルチョ（祈りの旗）と石積みの塔が置かれている。峠を少し下ったところでマーモットを見つける。さらに高度を下げていき、4000 m地点で左岸から右岸へひざ下程度の渡渉。渡り終えたところでキャンプ地のツェリ・ジャタンである。川の合流地の突端で、湿った草地になっている。少し上流には現地民のテントが見えた。

◎9月23日　ツェリ・ジャタン→シャキャパサン（3983 m）曇りのち晴れ、夕方より雨

今日の行程はヤリ・ラ（4710 m）まで急登したのち、次のキャンプサイトのシャキャパサンまで登った分下りるというものだ。

8時に出発し、1時間300 mアップのペースで休み休み動く。ヤリ・ラではオーストラリ

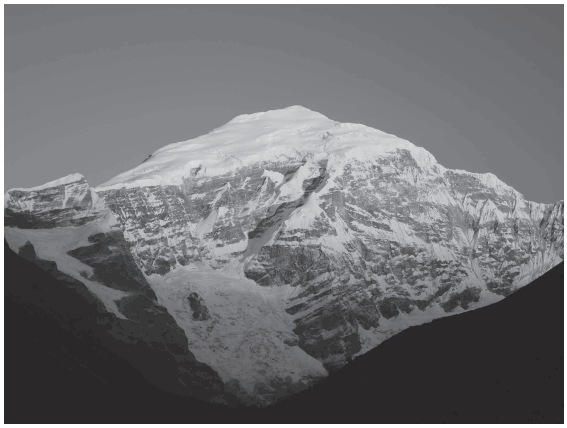


写真３　朝日に照らされるチョモラリ 7314 m

アから来たトレッカーとすれ違う。13 時 19 分シャキャパサン着。難所と思われたこの日も、皆ペースをつかみつつあるようで無事通過した。キャンプ地では好天と清流に恵まれ、水浴び、洗濯と開放的な時を過ごした。

◎9月24日　シャキャパサン→チェビサ(3867 m)
　曇りのち晴れ、夕方から雨

いつも通りの出発時刻で、今日はゴンブ・ラ(4445 m) 超えを目指す。一度尾根上へあがり、谷を数本トラバースしたのち目的の峠を越える。途中ブータン軍の密輸パトロール兵とすれ違い、トレッキングパーミッションを提示する。

12 時チェビサ着。深く削り込まれた峡谷から落ちる水が、この村の中心を流れる。伝統的な家屋が 20 棟以上立ち並び、アーチェリー場もある。活気のある村で、新しい極彩色のマニ車を建設中であった。

◎ 9 月 25 日　チェビサ→リンシ（4013 m）晴れのち曇り

馬方の一人がラヤに帰り、新たにチェビサ村の年配二人が加わった。8 時に出発し、9 時ごろ鳥葬の風習を残しているというガイール村を通過する。一度尾根をトラバースする形で高度を上げ、11 時リンシ村に入る。Basic Health Unit（BHU）が出迎えてくれる。入村前から、丘のうえの古風な姿が印象的だったリンシ・ゾンを右手に見つつ、モレーンを詰めて南に下りるとキャンプサイト。下地は快適だが風が強く寒い。

◎ 9 月 26 日　リンシ→ジャンゴタン（4093 m）
　くもり時々雨のち晴れ時々くもり

8時発。長い峠越え。4300 m付近のパロ―ティンプー分岐までは傾斜のある道をいくが、以降 1 時間ほぼ高度を変えずにトラバースしていく。目的の峠であるニレ・ラ（4850 m）から流れ出る谷を左岸から右岸へ渡渉すると、再び登りが始まる。11 時 38 分ニレ・ラ着。そこから急ザレ道を駆け下り、あとは谷筋のふみ跡を下りていくのみ。1 時間 400 m ダウンで 14 時 15 分ジャンゴタン着。

◎ 9 月 27 日　遠足（4355 m）曇り時々晴れ

ジャンゴタンはトレッカーでにぎわう一大目的地だ。チョモラリへとむかう U 字谷の開口部に散在する巨岩と、そのうえに残る土着王の宮殿跡が印象的なこのキャンプ地は、私たちがいた間にも、ほかに 4 つほどの大人数パーティの滞在があった。個室型のトイレ棟が備え付けられ、飲料やたばこを扱うショップも存在する。ラヤ以来の整備されたキャンプ地である。私たちはここを拠点として遠足を行った。行先はツォプ湖で、放流されたマスの泳ぐ深青色の水をたたえている。4 時間程度の散歩道であった。

◎ 9 月 28 日　ジャンゴタン→トンゴ・サンバ
　（3230 m）快晴のち晴れ

朝3時、幻想的な月夜のチョモラリ (7314 m)。時が止まったかのように、灰色の輪郭を朝まだきの空に映し出している。この日はトレッキング開始以来一番の快晴で、乾季の到来を直感させた。5 時に朝焼けを迎え（写真 3)、6 時ごろにはすっきりと晴れ渡った青天井と、ヒマラヤの白い頂が、目の覚めるような美しいコントラストを描いた。

この日も 8 時出発。気持ちの良い天気の中どんどん下山していく。キャンプ地を少し下ると地元の人の生活区があり学校や BHU、役所がまとまっている。そこから川沿いに 2 時間ほど下ると軍の駐屯所で、さらに 1 時間下るとタンタンカである。ここはこじんまりとしているが、よく手入れされ、十分な設備もあるキャンプ地だ。

昼食をとり、鬱蒼とした森のなかの湿ったトレイルをさらに 2 時間ほど下る。川の左岸側に顔を出す草地がトンゴ・サンバである。地面には電信柱の柱部分が大量に並べられ、それをインド人労働者たちが人力で一本一本運び上げている。ずいぶん過酷な労働である。夜、ガイドから明日の行程は途中より車をつかえると聞いたが、最後まで歩くこととした。

写真４　トレッキング最終地点（ザンキパン）

◎９月29日　トンゴ・サンバ→ザンキパン（2740 m）快晴

いつも通りだが、最後の朝８時出発。昨日の通り川沿いの道でどんどん標高を下げていく。3時間行くと目の前に立派な橋が現れた。シャナへかかる橋だ。ここからは車を使えるということだから実質街に下りてきたことになる。このシャナの街は急速開発中のようで、建設途中の建物や資材運びのトラックが目立った。道路が通るとはこういうことなのだ。ただし我々は歩く。

天気はすこぶる良く、パロ川や村々を見下ろす形で走っている林道を行くのは爽快であった。13時25分、念願のラストキャンプ、ザンキパン（写真4）に到着。先に車で行って待っていた馬方たちが、ケーキとビールを用意してくれていた。

◎９月30日　ザンキパン→パロ

バスにて本当の街に帰ってくる。

10月１日～10月４日観光、帰国

（文責：酒井英人）

**4. おわりに―本トレッキング全体を通して―**

本トレッキングの実施が決まり、私がリーダーとなったのは６月、出発の約３か月前であった。学部２回生、山岳部２回生の私には重い責任であったが、とりあえず隊員全員が無事に日本に帰国したことを安堵している。私にとっては、大変な遠征であったが、得るものはそれだけ多かった。まずは、準備段階で実地での判断だけではなく、今回のような海外遠征においては渉外・会計の大切さを身にしみて感じた。日本国内の山行を行うにあたってはあまり考えていなかったことである。準備段階を経験するだけでも勉強になった。また、トレッキング中にはブータンの自然と人々に存分に触れ合えた。グレートヒマラヤの雄大な山々はもちろんのこと、自然の豊かさには驚かされた。ヒマラヤといえば、乾燥しており、動植物はあまり見られないイメージがあったが、それは覆された。また、その豊かな自然と共に生きている人々との交流を通してやはり自分とは異なる考え方を持って強く生きている姿には衝撃を受けた。そして、高所登山というものを一部分であるが体験することができ、高所の判断の複雑さを身をもって感じることができた。

本トレッキングを実施するにあたって京都大学ブータン友好プログラムから援助を頂きました。京都大学ブータン友好プログラム世話役である松沢哲郎教授、松林公蔵教授、幸島司郎教授の三氏のご協力、ご指導に、大変感謝しております。現地のトレッキングの手配にあたっては、マヤトラベル鈴庄様、ならびに、Lhomen Toursの皆様には大変お世話になりました。高所での判断などアドバイスを頂いた、山岳部OBの森本祐介様、木村泰久様、また日本留守本部を引き受けてくださった、小菅真吾様、谷川達紀様、ありがとうございました。このような貴重な経験ができたのは、以上の方々に加え、多くの関係各位のご支援によるものであり、こころよりお礼申し上げます。最後に、本トレッキングのスムーズな運営に協力された隊員諸兄にも感謝を述べ、稿を閉じることといたします。

（文責：六車光貴）

# マサ・コン峰初登頂へのみちのり

ブータンと京大の長い友好の歴史についてはいまさら言うまでもありません。そのうち、1969年の学術調査隊のころまでは、前号(74号)に語られています。今年は、その後のおおきな動きであった1985年の学術登山隊（マサ・コン峰初登頂）30周年にあたります。本号の関連記事をお読みいただく際の参考に、同隊関連の動きを二冊の文献からまとめてご紹介します(敬称略)。

1981年　日本ブータン友好協会設立（会長　桑原武夫）

1981年10月　日本ブータン友好協会旅行団(桑原、栗田靖之ほか)、ブータン訪問、ドチュ・ラからマサ・コン遠望。登山解禁近しの感触を山岳部に伝える。

1982年　京大山岳部有志、ブータン研究会再開。
ルナナ地方のトレッキングが解禁になる。

1982年10月　ブータン研究会　富永浩三・篠崎敏弘・宮坂実、インドにて情報収集。ブータン入国を図るも果たせず。1983年に3座の登山解禁との情報を得る。

1982年11月　登山計画推進のため、隊長：堀了平、登攀隊長:横山宏太郎を決定。
チョモラリ・カンリを第一候補に登山許可申請書作成。
ガンカー・プンスム解禁の情報があり、対象をガンカー・プンスムに変更して提出。

1983年8月～10月　ブータン・ヒマラヤ踏査隊　森戸隆男（隊長)、福嶌義宏（顧問)、吹田啓一郎、松井尚純、中山茂樹、高井正成、月原敏博
ガンカー・プンスム偵察と現地事情調査。1985年に京大と日本ヒマラヤ協会（HAJ）にガンカー・プンスム登山を許可する意向との情報を得る。

1984年5月　ガンカー・プンスム登山許可書届く。

1984年9月～11月　ブータン・ヒマラヤ偵察隊　人見五郎（隊長)、竹田晋也、月原敏博、毛利尚樹
登攀可能性を求めたガンカー・プンスム北面へは通行禁止。一方、南面は非常に困難と判明。ルナナ地方の輸送など受け入れ態勢は不十分。

1984年11月　堀、横山ブータン訪問、人見らと合流。偵察の結果およびHAJとの競合問題を考慮して、第二志望としていたマサ・コン峰への転進を決定。観光通商大臣サンゲ・ペンジョール氏より1985年マサ・コン峰登山許可の内諾を得る。

1985年　ブータン・ヒマラヤ学術登山隊
堀（隊長)、栗田（副隊長)、横山（登攀隊長)、人見（事務局長)、松林公蔵（医師)、神園泰比古、福崎賢二、青木小太郎、伊藤宏範、竹田、中山、高井、月原、岡田忠雄、菅野公一、毛利、カルマ・ドルジ（ガイド兼クライマー)、テレビ班として安岡卓治、中里雅行

2月　マサ・コン峰登山許可書届く

6月　竹田・岡田、船便の隊荷をインドからブータンへ送り届ける

8月　7日　先発隊第一陣日本発

8月16日　先発隊ブータン入り（横山･人見･月原・菅野)

8月22日　本隊日本出発（機体トラブルで1日遅れ)
先発隊ティンプー出発

8月25日　本隊ブータン入り

8月30日　本隊ティンプー出発

9月　9日　ジョンプーナ（4430 m）にて先発隊・本隊合流

9月13日　BC開設(5020 m)、全員BC入り

9月16日　ABC建設（5390 m）

9月23日　C1建設（6020 m）

10月　8日　C2建設（6420 m）

10月12日　C3建設(6690 m)、登頂態勢整う

10月13日　第一次登頂 横山・人見・中山・月原

10 月 14 日　第二次登頂　松林・伊藤・竹田・高井
10 月 15 日　第三次登頂　神園・岡田・菅野・伊藤（2 回め）、C3・C2 撤収
10 月 16 日　降雪の中 C1 撤収、ABC で堀隊長らに迎えられる
10 月 21 日　ABC 撤収、BC に帰着
10 月 23 日　BC 撤収
10 月 29 日　ティンプー着

「京大山岳部報告第 17 号（1994）」および「偉大なる獅子マサ・コン峰登頂（堀了平、1986 年、講談社）」から取りまとめ（横山宏太郎）

# 第 34 回雲南懇話会（2015 年 10 月 3 日開催）　講演概要

山岸久雄、安仁屋政武

第 34 回雲南懇話会は 2015 年 10 月 3 日、東京都新宿区市ヶ谷の JICA 研究所国際会議場で開催され、88 名の参加者がありました。以下、講演の概要を紹介いたします。

## 1.「アマゾン先住民の文化と暮し」―シングー国立公園及びその周辺地域の開発について―

NPO 法人 熱帯森林保護団体代表
南　研子

アマゾンの熱帯林、及びその地に暮らすインディオと呼ばれる先住民の現状は、開発による熱帯林の破壊に大きく影響され、有史以前から続く独自な文化の継承が危ぶまれている。その最新の実情が、講演者らが今年 7 月に行った第 29 回目のアマゾン視察に基づき、映像を交え報告された。現地では、地平線の彼方まで広がる肉牛飼育の牧場、大豆栽培、養鶏、エタノールの原料となるサトウキビ栽培、鉱山開発（特に鉄鉱石）、水資源開発（ダム建設）、金採掘と水銀の使用など、多岐にわたる開発行為が熱帯林を大きく破壊している。これらの熱帯林破壊は先進国に暮らす人間の消費と深い因果関係がある。遠いアマゾンの熱帯林消滅の危機は日本人の生活と無縁ではない。兎に角、圧倒的な迫力のお話である。26 年間にわたり延べ 29 回アマゾンを訪問し、先住民インディオと生活を共にしてきた人ならではの慈愛と慟哭、そしてインディオを支援する強靭な意志が感じられる講演であった。

## 2.「ネパール・ランタンプロジェクト、OCUAC」―ランタン谷と峰々に魅せられて、夢の途中―

大阪市立大学山岳会、
2015 年ランタン・リ（7205m）登山隊
兵頭　渉

大阪市立大はランタン谷と縁が深い。ヒマラヤでの日本隊最初の遭難は同山岳会のランタン・リルン登山中に起きたものである。同山岳会は 2010 年春、この遭難の 50 回忌墓参団を編成し、ランタンリルン BC と、ランタン村に建てた墓碑の前で法要を営んだ。この時、ランタン谷の山々への登山が話題に上がり、以来、「市大ランタンプロジェクト」としてランタン谷へ多くの登山隊を派遣してきた。本講演では同プロジェクト立上げの経緯、過去 5 年間の活動、2015 年ランタン・リ登山隊の活動が報告された。同登山隊は登山中、4 月 25 日のネパール大地震に遭遇した。前回の雲南懇話会では大地震の惨状についての速報が行われたが、今回の講演では多数の写真を使い、詳しい報告がなされた。かつての美しいランタン村の再生と復興を願い、再びランタン谷と取り巻く峰々を訪れる時が早く来ることを祈りつつ、復興支援に関わってゆきます、と話が結ばれた。

## 3.「ブラジルの茶園・茶産業」―日系移民の開拓の歴史―

ティー・リテラシー、茶道家、
お茶で南の国々とつながる会
代表　上原美奈子

ブラジルに日本の緑茶を宣伝・普及させるために訪問した講演者は、その緑茶を現地の人達が BANCHA と呼ぶことに驚いた。帰国後、この理由を調べてゆく中で、一人の日系移民、岡本寅蔵氏に行きついたという。「現在、約 160 万人の日系人が住むといわれているブラジルに

は、Japones Garantido という言葉がある。日本人であれば信頼できる、信用するに値する、という意味だそうだ。日系移民が築いたこの言葉の重みを、珈琲の国ブラジルに一大紅茶産業を打ち立てた岡本寅蔵氏の歴史とともに考えてみたい」(「講演要旨」より) として、たった一人の移民の「拓魂」による茶業の発展の歴史が紹介された。

岡本寅蔵氏は 1893 年、奈良県に生まれ、1919 年、夫婦でブラジルに移住。この時、青桐の苗木を持参したものの、上陸時に海に落としてしまい、やむなくサンパウロ植物園の茶の種 25 粒をレジストロの農園に蒔いた。これが全ての出発点だったとのこと。一時は大いに発展したレジストロの茶業はその後衰退し、天谷さんただ一人が茶業を継続した。しかし、「AMAYA Tea」の現地での評判は高く、これに触発された 88 歳の女性が「おばあ茶ん」という紅茶を売り出した。移民の人達の日本への想いは深く、日本の皆様に是非、これらのブランドを検索してみてほしい、とのことであった。

### 4.「アンデス山脈の家畜と祖先種、そしてジャガイモ」

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科准教授　大山 修一

講演はペルーの美しい風物の写真や、「ナスカの地上絵」の観光に来た日本人旅行者に近ずくタクシー運転手のことなど、日常生活のユーモラスな話で始まり、次第に本題へと移っていった。アンデス山脈には有名なラクダ科の家畜、アルパカがいる。この祖先野生種と考えられているのがビクーニャである。ビクーニャにはおもしろい習性があり、その一つが、ため糞をすることである。そして、この糞場に生育するのがジャガイモの祖先野生種の一つ、アカウレである。ジャガイモの起源地はアンデス山脈のチチカカ湖畔とされてきたが、これまで具体的な場所の報告はなかった。どうも、ラクダ科動物の糞場がジャガイモの起源地だったのではないか？との仮説が紹介された。ビクーニャの糞場に生育する野生種のイモの地下茎は、糞や糞に由来する土壌層の厚さ以上に伸長することは無く、その厚さはイモの大きさを制限する要因となっていたらしい。野生種のイモが肥大する条件や、イモを掘ることの重要性などが語られた。

### 5.「南米・パタゴニア氷原― 30 余年の調査の軌跡」

筑波大学 名誉教授　安仁屋政武

パタゴニアは南米の南端に位置する広大な地域であり（日本の面積の 2 倍強)、チリ、アルゼンチンの両国にまたがっている。チリの太平洋岸には、日本はもとより世界でもほとんど知られていない、世界有数の規模のパタゴニア氷原がある。講演者はこの地域の氷河について 1983 年からいろいろな調査を行ってきた。今回の講演では、調査地への旅の珍しい写真やエピソード・苦労話を交えながら、これらの調査の軌跡が語られた。氷が浮く湖面にこぎ出すゴムボート。しかし、ライフジャケットは着用しない。零度近い水中に落ちたらライフジャケットを着けていても、いなくても結果は同じ・・・ということらしい。足下にクレバスを覗きながら歩く光景、氷河から流れ下る激流を飛び越す光景、何れも怖い画像である。しかし調査・研究に携わる人々の表情は明るく柔和である。「羊の丸焼」の様子が、羨ましい。

### 第 35 回雲南懇話会のお知らせ

1. 日時：2015 年 12 月 19 日（土）13 時～ 17 時 30 分。茶話会 17 時 30 分～ 18 時 40 分
2. 場所：JICA 研究所 国際会議場（東京都市ヶ谷)
3. 懇話会の内容（講師、演題など変更ある場合は、ご了承をお願い致します)。

①「騎馬鷹狩文化の起源を求めて」
―アルタイ山脈に暮らすカザフ遊牧民と鷹匠の民族誌―
特定 NPO 法人「ヒマラヤ保全協会」理事、農学博士（ドイツ、カッセル大学)
相馬 拓也

②「慈恵医大槍ヶ岳山岳診療所の活動報告」
―山岳診療所から見える山の世界―
慈恵医大槍ヶ岳山岳診療所医師、聖マリアンナ医科大学スポーツ医学講座講師
油井 直子

③「幡隆上人の槍ヶ岳開山と飛州新道」

―信州の鷹匠屋・中田又重郎と共に―
槍ヶ岳山荘グループ代表、笹ヶ峰会
穂刈 康治

④「茶の原産地としての雲南」
（茶の文化振興会）社団法人 豊茗会会長、
（元）愛知大学教授　松下　智

⑤「遊牧、移牧、定牧」―モンゴル、チベット、ヒマラヤ、アンデスのフィールドから―
愛知県立大学名誉教授、放送大学教授
稲村 哲也

## AACK 関東会・笹ヶ峰会　新年会のご案内

恒例となりました関東在住の AACK 会員、笹ヶ峰会会員による新年会を来年 1 月、下記の通り計画しています。例年、元気にご活躍のシニア世代の方々が多数参加され、刺激を受けます。団塊世代の皆様、現役で仕事をされている皆様、世代間交流の良い機会です。近い世代の方々と誘い合わせ、奮ってご参加ください。12 月始めには改めて笹ヶ峰会メーリングリスト等で開催案内をお送りします。ご問合せは幹事までお願いします。

新年会幹事　山岸久雄

記

日時：2016 年 1 月 21 日（木）
受付開始 18:15
開始 18:30
終了 20:30 頃
場所：東レ社員クラブ
（中央区日本橋本石町 3-3-16
日本橋室町ビル 1 階
電話 03-3245-5948
最寄り駅：地下鉄三越前）
会費：6000 円を予定しています。

## AACK ニュース

### 会員田中二郎氏が「Lifetime　Achievement Award」を受賞

2015 年 9 月、国際狩猟採集民学会において田中二郎・京都大学名誉教授が「Lifetime Achievement Award」を受賞されました。次号に詳しいご紹介を掲載する予定です。

## 会員動向

# 編集後記

今年は京大山岳部のブータンヒマラヤ学術登山隊によるマサ・コン峰初登頂から30周年です。これにちなんで行われた会合を榊原さんが報告してくださいました。

この秋、山岳部現役主体のブータントレッキング隊が、マサ・コンの麓などを訪れ、上記の会で帰国早々の報告がありました。同隊からも原稿をいただきました。

報告書等を再読し初登頂までの経緯をたどってみると、隊の成功は多くの方々の努力・協力の結果であることがあらためて感じられ、私としては何度でもお礼を申し上げたい気持ちになりました。

また予定より少し遅れて、雲南懇話会の開催間際になってしまい申し訳ありません。ともかくも、皆様のご協力により第75号を発行することができました。ありがとうございました。

横山宏太郎

次号原稿締め切り　2016年1月16日
原稿送り先：横山宏太郎

発行日　2015年12月15日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　松沢哲郎
発行所　〒606-8501
京都市左京区吉田本町（総合研究２号館４階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科　竹田晋也　気付
編集人　横山宏太郎
製　作　京都市北区小山西花池町1-8
㈱土倉事務所